

いせ志美尋

景観サポーター情報紙



平成25年度 景観先進地視察

視察日 平成25年11月9日(土曜日)

視察地 足袋蔵のまち 埼玉県行田市

視察内容 活動内容、理念等研修・街中視察

参加者 19名(サポーター14名・事務局5名)

行田がもっとも行田らしかった頃の
近代化遺産を再評価！
足袋にかかわる施設でネットワークを形成する！

点を線に
↓
線を面に
↓

街と街の歴史を市民に紹介。
そこから始めるいきいきしたまちづくり！

《大変だった視察先の選定》

景観サポーター実行委員会は平成25年度より部会を編成。恒例となっている行事を景観サポーターが主体的に企画する試みを実施しております。

景観先進都市視察部会は9名の景観サポーターで構成され、昨年末より活動を開始して数回の打ち合わせの後、視察先の選定を行いました。

部会メンバーはそれぞれの仕事をこなしながら、景観サポーターに参加しています。メンバーのスケジュールを合わせて一同に会する事にとっても苦労しました。その中でメンバー各位の協力と都市計画課景観係の支援に感謝します。

さて、数カ所の視察候補地から「行田市」に決めた理由ですが、行田市は人口10万人足らずの中堅都市で、内陸部の多様な文化が残されています。伊勢崎市と類似した要素が多くありました。

足袋蔵（倉庫）を中心とした古い建築物を保存しながら現在でも利活用し、景観維持と修景に努力されている活動が、我々の故郷である伊勢崎市の景観づくりの参考になると思ったからです。

《いよいよ行田のまちへ》

視察当日は景観サポーター14名と都市計画課から5名の合わせて19名が参加しました。

「足袋蔵まちづくりミュージアム」ではNPO法人“ぎょうだ足袋蔵ネットワーク”（以降、足袋蔵N）代表理事の朽木さんをはじめ多数のメンバーに出迎えて頂き、早速活動内容の説明をお聞きしました。その後、「まちあるき」に出かけました。昼食を挟み約2時間半の見学でした。ご案内頂いた中島さんは足袋蔵Nの副代表理事で行田市の文化財保護課に所属しています。地域の文化財に関する見識が豊富で流暢なお話しぶりと相まって楽しく判り易い説明を拝聴することが出来ました。

足袋蔵Nは江戸時代から続いた足袋産業の遺産を後世に残すため朽木さん、中島さんの強力なリーダーシップの下で次々に新しい活動を生み出し、活動を継続されている様子に感心しました。見学した施設は元々「足袋の保管を目的とした倉庫として使用されていた」とのことですが、外観はそのままに他の目的に転用して活性化する努力をされている様子が伺えました。

それらは何れも手作り感があり、これにも好感が持てました。我が伊勢崎市には「伊勢崎銘仙」があります。この貴重な文化を後世に残すためには足袋蔵Nと同じ様な組織が構築され強力なリーダーシップで活動することが必須であると強く思った次第です。地域の文化を継承して残すことが自ずと景観維持に繋がることは云うまでもありません。

景観サポーターのメンバーが中心になり、足袋蔵Nの活動を参考とし貴重な文化と景観を継承される活動を構築することに期待したいと思います。



歴史を生かした足袋と蔵のまち行田

景観サポーター 秋山 暉

平成25年11月9日(土)我々を乗せたバスは朝8時40分頃に伊勢崎市役所を出発、国道354号～上武国道～国道125号を快走し1時間程で、あっという間に行田市に到着。「なんと近いこと」というのが実感です。

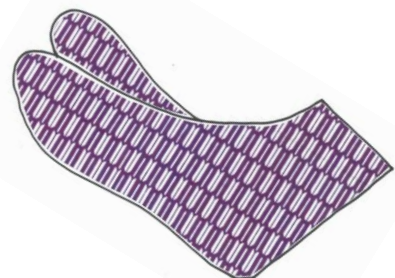
個人的には行田は2度目で、初めて訪問したのは今年の春、さきたま古墳の花見と忍城などの観光が目的でした。

昨年、映画「のぼうの城」を見に行っただけがきっかけでした。その後、行田市の事をホームページ等で調べはじめた。というのが正直なところです。

今回の訪問では案内して頂いた「足袋蔵N」朽木さん、中島さんの丁寧かつ情熱のこもった説明によって行田の”足袋産業の歴史”とそれに関わってきた”蔵”についての文化遺産を知る事ができました。

その中でお二人が強調していた「決して観光目的でなく身の丈にあったまちづくり」「文化遺産を活かしたまちづくり」という言葉が印象的でした。

視察の具体的な内容については割愛させていただきますが今回、自分なりに強く感じた点は「まちづくり」には、その地域の目に「見える遺産」と「見えない遺産」をいかに有効に結び付けて活用するかがポイントだと思いました。景観的だけではなく歴史・文化的内容も大事にした中味の濃い街づくりが目標ではないかと改めて感じました。



往時を偲ぶ足袋蔵の街

景観サポーター 七條 清

埼玉県行田市は江戸時代中頃から足袋作りが盛んになり、明治20年代以降は、我が国での足袋産業が発展し、最盛期の昭和13年には年間約8,500万足、全国の約80%の足袋を生産する”日本一の足袋のまち”として繁栄しました。

しかしながら、当時輸送運搬の手段としての鉄道網として東武鉄道と秩父鉄道を利用する選択を地元がとりました。国鉄(現在のJR高崎線)は採択されなかったのです。

それが皮肉な事に世界が変転し、今はJR高崎線が主流になり、当時、秩父鉄道行田市駅周辺を中心として栄えた足袋産業も閑散となりました。

それに加えて文化、生活スタイルの変遷で靴下洋風文化となっていったのです。街は衰退していきました。

そこに残されたのは足袋製造会社群という街でした。産業形態としての足袋は分業体制で13から14工程を要します。

それぞれの職人集団が街を形成していたのです。

これは大阪、堺の福助足袋が始めた分業生産システムで、これを手本にしたものでした。

コンピューター制御のミシンを使う最新式の工場でも、同じ分業生産システムが取られています。そんな関係から行田市駅周辺地域の職人集団の街並みは、それぞれ足袋蔵を構えたゾーンになっていました。しかしながら、近年操業を続ける足袋産業もライフスタイルの変遷及び、労働者賃金の高騰、職人の高齢化、施設の老朽化などから生産拠点を市街、海外へと移していったのです。現在では約40社余りで、全国の約35%を行田で生産しています。

そうした廃業、転業で蔵が解体され壊されていきました。その危機感に背中を押され行田市の足袋産業の歴史、文化、技術を後世に伝えるべく“足袋蔵N”が生まれました。

埼玉県の「NPO活動本格化支援助成」を受けて、平成17年10

月8日に”足袋とくらしの博物館”を開館させました。

足袋蔵は出来上がった足袋を出荷するまでの間保管する倉庫です。

靴下の普及で足袋を履く人が減り、足袋蔵も次第に使われなくなりました。近年、利活用の動きが広がり、そば屋、菓子屋、パン屋、居酒屋、料亭、珈琲館、博物館等に変身していつている姿を見て歩きました。日を改めて個人でゆっくり「行田つれづれ足袋蔵まち歩き」をしたくなる充実した一日一善でした。



平成25年年11月9日、伊勢崎市景観サポーターの先進都市視察で、足袋蔵のまち・行田市を訪問しました。“古代蓮の里”や“埼玉古墳群”、また映画“のぼうの城”で一躍有名になった“忍城”でもなく、“足袋蔵”が集積する既成市街地の路地裏や蔵巡りです。

江戸時代後半から昭和30年代まで、足袋の全国シェア約8割を占めた行田市の足袋製造。冬に一挙に訪れる需要に向けて通年生産した足袋を保管して置く蔵、それが足袋蔵で、見世（店）蔵と異なり、表通りに面している必要がなく、今も屋敷内や裏通りなどに約70棟残されています。

まずは“足袋蔵まちづくりミュージアム”を訪問し、足袋蔵N代表理事・朽木さんと副代表理事の中島さんから活動内容や足袋蔵の歴史の説明を受け、昼食を挟んで3時間半のまち歩き、そして最後に、足袋蔵Nのお二人と我ら景観サポーターとの意見交換と言うスケジュールでした。説明いただいた多くの事柄が非常に参考になりましたが、中でも印象深かったことが3点あります。



- 足袋蔵Nは観光化や賑わいの創出を目的としていない。
- 足袋蔵Nは行政に対して適宜事業提案を行い、結果的に支援や委託を受けることはあるが、最初から行政に依存する姿勢はない。
- まちづくり活動は一遍にやろうと思わず、できるところから一つずつ着実にと言う姿勢。

一点目のまちづくりとその経済効果は難しいテーマ。実際、ビジネス目的が目立ち過ぎるまちづくりで頓挫した事例を沢山見えています。足袋蔵Nが、解体予定だった忠次郎蔵（店蔵）を修復し、復活させたのが2002年。以来、11年間に亘り、少しずつでも着実に足袋蔵の保存活用に力を注ぎ、その成果が現れ始めている現実を見ると、地区の歴史的遺産や資産を保存活用し、街の記憶や歴史を後に伝え続けると云う純粋な姿勢が、経済効果を含め、賑わいや活性化など多くの実りを与えてくれることを実感しました。

そして、まちづくりのキーパーソンは、まちづくりに対して収益を期待する人や組織ではなく、「街を何とかしたい。歴史的資産・遺産を守り残したい」その情熱を、静かに長く持ち続けられる人であること。そして、朽木さんと中島さんの二人が、まさにそのような人であると感じました。

時代の変遷に応じて世の中の価値観も変わり、街の機能の要・不要と善・悪の判断は難しく、絶対的に正しい施策はないようですが、残して後世に伝えるべきモノと壊して変えるべきモノとの判断を誤ると、街の貴重な財産を失ってしまいます。“まだ間に合う”、“もう間に合わない”・・・その狭間で苦慮している地方都市の新たなまちづくり。我ら伊勢崎市においてもその例外ではなく、区画整理先進都市としてその正の部分と負の部分がテレビで何度も放映され、共通に指摘されたのが「街中の衰退と郊外の発展」。語り尽くされたこれらの指摘を今更ぶり返しても仕方なく、“まだ間に合う”部分で何かをしなければ・・・と大きな刺激を与えられた足袋蔵の街・行田市のまち歩きでした。

とても似ている行田と伊勢崎

景観サポーター 佐藤 好彦

私が行田を訪れたのは昨年秋が最初でした。

あの映画「のぼうの城」の宣伝に誘われての事です。

家内と二人予備知識がほとんど無いままに訪れ忍城の御三階櫓と行田タワー、そしてゼリーフライを堪能したのでした。御三階櫓は模擬櫓で博物館となっていました。しかし、鉄筋造りとはいえランドマークとして充分存在感があり「伊勢崎にもあったらいいなー」と思って見ていました。

更に、甲冑（レプリカ）の試着体験や「おもてなし甲冑隊」など歴史ファンにとっては、わくわくさせるものがありました。

歴史的には「織豊時代（天正18年）豊臣秀吉の家臣、石田三成が忍城を攻略するために石田堤を28kmにわたり造ったのです。

しかし、水攻めしたもののうまくいかなかった。というのが概略でしょうか。

今もその堤の一部が残っているようです。

昨秋の訪問では、街中までは足を延ばしませんでした。足袋の蔵が沢山残っていて“まちづくり”に役立っている。とその時に知りました。いつかその街中へ行ってみようと思っていたところでした。

今回、奇遇にも景観サポーターの景観先進地視察で「足袋蔵のまち行田」に行くと決まった時“あっ、よかった！”と思いました。

行田に着いてまず感じたことは「足袋蔵N」のメンバー朽木さん、中島さんらの熱い思いでした。

- 観光で街の活性化を目指すのではなく「自分達の活動を通じ街を知ってもらおう。」
- 街の規模からして、沢山の観光客を受け入れるポテンシャルが無い。
- 逆に言えば、この街に大勢の観光客が押し寄せることは自分達の生活が立ち行かなくなってしまう不安。
- 延々と受け継がれた行田の風情が壊されてしまうことは市民が望む“まちおこし”と不一致。





など、肩ひじ張らず身の丈に合った取り組みをお聞きし、背中を押された思いがしました。

「まちおこし。まちづくり。」という、どうしても市外から多くの観光客を招致すること。と私達は考えていたように思いました。伊勢崎に置き換えても行田と同じ事が云えるのではないのでしょうか。

我がまちで、今話題の世界文化遺産「田島弥平旧宅」を中心とした島村も多くの観光客を受け入れる能力は無いように思えます。

もし、多くの観光客が押し寄せた場合、地域の生活は一変してしまうのではないのでしょうか。

まさか、島村の住民の多くが観光土産店を開業する訳もないでしょう。第一島村の良さは観光客でごった返した雰囲気では知ることができないでしょう。観光土産店など何もない集落の景観をゆっくり眺めながら、その土地の風情を感じ取ることが本来の楽しみ方ではないで

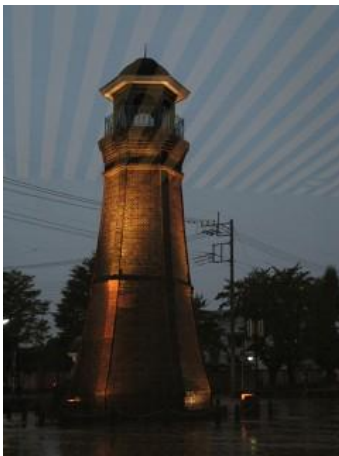
しょうか。例えば、中之条町六合の赤岩集落（重伝建）の起伏に富んだ農道をゆっくり歩き、その時間に浸ることでこの地の風情を垣間見ることができるのです。



燈華会での一日景観展

10月20日「燈華会（光のページェント実行委員会主催）」に参加させていただき「一日景観展」を午後1時から赤石楽舎のギャラリーにて催しました。内容は景観サポーター活動の紹介をしたパネル展示や電子紙芝居「伊勢崎駅物語」「創説 旧時報鐘楼物語」の上映をしました。

沢山の市民の方に景観の大切さと景観サポーターの活動を知っていただく良い機会となりました。しかし一日景観展はあいにくの空模様でとても残念でした。来年に向け景観展の内容をブラッシュアップし、より多くの方々に見ていただけるよう工夫をしたいと思います。



編集後記

今回寄せられた原稿を編集しながら感じたことですが、速さや量、便利さを求める“まちづくり”は一昔前に終わっている。と皆が感じているようでした。本物や本質（アイデンティティ）といった精神面の豊かさが望まれる時代に入っているのだ。と再認識することができました。

景観サポーター情報紙「いせさき美尋」とは？

美尋の「美」→多方面から考察した美しいもの。「尋」→素晴らしい景観を尋ね求める。対象物の本質の探究。

景観サポーターは、伊勢崎の自然、歴史、地域文化、先進性等景観の大切さ・素晴らしさ・美しさを多方面から尋ね（美尋）、景観の価値を学び・発見すべく研鑽を重ね、その発表の場を「いせさき美尋」と名付けました。

発行／伊勢崎市景観サポーター実行委員会編集部

『いせさき美尋』景観サポーター情報紙第6号

平成26年1月1日発行 連絡先／090-1252-2509（佐藤好彦）